

リアル・ファンタジー

－ Bernard Malamud の “Rembrandt’s Hat” における他者理解－

井崎 浩

Realistic Fantasy: Understanding Others in Bernard Malamud’s “Rembrandt’s Hat”

Hiroshi IZAKI

序

1973 年に出版された “Rembrandt’s Hat” は、Bernard Malamud (1914-86) の最後の短編集の表題作となっているにも関わらず、高い評価を得ているとは言いがたく、言及されることもまれな作品である。こうなった理由としては、ほんの些細なとしか思えないことをきっかけに起こった二人の人物の諍いと和解に終始する物語だということが挙げられよう。確かにその通りなのだが、実はこの物語の奥底にはいかに他者を理解するかという問題が横たわっているとも読めるのである。本論文ではそのような観点に立って作品を分析しその真価を明らかにしたいと考えている。その際、Malamud への影響関係が指摘されることのあるユダヤ人思想家 Martin Buber の哲学に強くスポットを当て、⁽¹⁾ 作品理解の一助としたい。

I.

この小説の主要登場人物は、34 歳の美術史家の Arkin と 12 歳ほど年上の彫刻家 Rubin である。二人は同じ美術学校の教師として働いており、上述の諍いが起こるまでは友人とはいかないまでも概ね良好な関係を維持していた。Rubin はどちらかといえば寡黙なタイプで、意見めいたことを口にすることもあったが、たいていは陳腐な人生論、芸術論のたぐいで、自分と自分の作品については多くは語らない。一方の Arkin は美術史家という職業柄もあって時には皆の前で芸術作品について長広舌をふるうこともある人物である。そういう対照的な人物設定がされているわけだが、問題は性格だけではなく芸術観にも大きな違いがありそうな点である。あるとき、Arkin が教員食堂でジャクソン・ポロックの作品について一席ぶっていたとき、Rubin がとっさに怒りを爆発させたことがあった。Rubin に言わせれば、“The world of art ain’t necessarily in your eyes.” ということになる。一触即発な場面であったが、Rubin が “with dignity, reverted to silence” (574)⁽²⁾ となって事なきを得たものの、二人の芸術観や芸術に関する姿勢に大きな隔りがあることを感じさせる場面ではある。

そんなある日、Rubin が白い帽子をかぶって姿を現したとき、Arkin は次のように声をかけるのである。

I'll tell you why I like it so much. It looks like Rembrandt's hat that he wears in one of the middle-aged self portrait, the really profound ones, I think the one in the Rijksmuseum in Amsterdam. May it bring you the best of luck. (574)

この言葉をきっかけに Rubin は Arkin を露骨に避けるようになり、Arkin はなぜそうなったのかいぶかしむことになっていき、次第に対立は激しさを増していくのである。

こうなった原因は、Jeffrey Helterman によれば、“the comparison with a great artist might humiliate one of little talent” (134-35) とあるように、一流とは言えない Rubin に対して Rembrandt を引き合いに出す Arkin の無神経さであり、Begoña Sío-Castiñeria が “he[Arkin] may have provoked an inferiority complex in the sculptor, due to his tacit comparison between Rembrandt and a frustrated artist such as Rubin.” (105) と指摘するような相手の劣等感を刺激する Arkin の言動にあるのは間違いない。ところが、Arkin はなぜ Rubin の態度が急変したのかについて一切思い当たらず、まずはただ不安にかられ、あとでは激しい怒りがこみ上げてくるのであった。自分には落ち度はないと決めつけ、Rubin の性格か病気、あるいは一種の精神錯乱に原因を求めるのであった。そういうことが数週間、数ヶ月たっても事態は好転せず、さっぱり訳が分からなくなった Arkin はいっそのこと詫言を入れようと思うのだが、それを果たす前に二人の関係はさらに徹底的に決裂してしまうのであった。そんなプロセスの中であって、Arkin は何度か Rubin の個展（流木展）のことを思い出している。決して成功したとは言えない個展について Arkin は Rubin の作品に対して一度も言及せずに終わっている。それはある種の思いやりとも言えそうなものだが、Rubin にはひどい仕打ちだったのかといぶかりもするのである。さらに、再度、個展を開いてはどうかとまで勧めたことがあったのだが、Rubin はまるで命を狙われたみたいな反応をしたこともあった。明らかに Rubin は自分の彫刻家としての力量に不安を感じているのだが、Arkin はその Rubin の思いには気づかないままなのである。Kathleen G. Ochshorn によれば、Arkin は芸術家の生涯がどれほど厳しいものかを知らないでいるのだ (234)。

II

Arkin の発想は、たとえ相手が傷ついたとしても、自分にその意志がなければ、“no offence where none's intended.” (575) というものであり、手前勝手な印象をぬぐえないものとなっている。彼は自分を好いてくれない人間には好意を持たないたちで、Rubin の態度に激しい憎しみさえ感じるのであった。それらが障壁となって自分の発言の問題点に思いが至らないのである。こうした姿勢を Sío-Castiñeria は “monological tyranny” (106) と呼んでいる。Arkin の思考の “totalizing character” と “monolithic semantic character” を問題視し、それは、“obviously disregarding different interpretations other than his own” (106) と述べるのであるが、自分とは異なる見解を軽視するという点では Arkin の問題点を鋭く突く評となっていると言えるであろう。Arkin のように自己の視点から一方的に相手を断罪したり、決めつけ

てしまうような発想は、“unidimensional monodiscourse” (107) とでも呼ぶべきものなのである。要するに、他者に対する一方的な思考回路がここでは浮き彫りになっているのである。

それゆえに何度か和解しようと考えたり、Rubin の心中を推し量ろうとはするものの、上記の一方的な思考回路が邪魔をしてしまうこととなり、余計怒ることはあっても二人の確執はやむことはないのである。しかし、そういった問題点はあるものの、もともとが苦勞性で、ひょっとして悪いのは自分ではないかという怖れが潜在しているような場合には、一つ事をみじめなまでにとことん思い煩うたちでもある Arkin は次第に Rubin の憤りの本質へと近づいては行くのである。まずは成功とは言えなかった木彫展のことを思い出し、自分がこの個展に感心してはいなかったし、一度として感想を述べたことがないことに思い当たる。それはいわば思いやりからだったのだが、場合によっては残酷にもなり得ると考えてはいる。もう一度個展を開いてはと勧めたときの Rubin のさも苦しげな動揺の色にも気づいてはいたのである。それでも Rubin の態度には変化がなかったのだが、例の白い帽子の一件ですべてが変わってしまったことだけはわかったが、あの発言が Rubin の何を刺激したのか、または、いろいろなことが重なった末のことかとも思うが、真相にはたどり着かない。

そんな中、Arkin の誕生日にもらった白いカウボーイ・ハットが盗まれるという事件が発生する。盗んだのは Rubin だと推測されるが、そこには白い帽子への Arkin の言及が問題だったとの Rubin のメッセージが込められていたのかもしれない。この段階での Arkin にはそのメッセージは届かないままであったが、無意識にはなにかを感じていたかもしれない。だが、この件を機に二人の関係はさらに悪化することになる。ことあるごとに顔を合わせてしまい、最後には憎悪と冷やかかさへと至り、Arkin は互いにのどを締め付け合っている二人の姿を思い浮かべるまでになる。昔、画を鑑るほうが人間をみるよりよっぽど易しいことだと言われて腹を立てたものだが、ようやくそのことが身にしみて分かった思いだった。

さらに半年後、Rubin が母親の喪に 7 日間服していることを知った Arkin は、Rubin のアトリエへと忍び込む。そこで何時間も目下 Rubin が取り組んでいる溶接の作品を見て過ごすことになるのだが、時間をかけて一つ一つの彫刻を見てまわっているうちに、もう一度個展を開いたらどうかといわれたことが、どうして Rubin をおびえさせたのかそのわけが読めたように思った。この鉄のジャングルというべき作品群のなかで、傑作といえるものは、おそらくたった一つの彫刻しかなかったのである。Rubin が恐れていたのはそのことの発覚であり、それを人に知られることを恐れていたこと、Rubin が自分をおそらく二流の芸術家と見なしていたことに思い至るのであった。

それから数日後、Rembrandt の自画像についての講義の準備をしていた Arkin は、映写スライドの点検をしながら Rembrandt の帽子に関する自分の認識の誤りを知るようになる。自分の Rembrandt の帽子に関する発言が問題だったことを改めて認識することになるのだ。鈴木はこの Arkin の発言には実は 3 つの問題点があることを詳しく述べている。長々と引用することは避け要点だけを記す。

- (1) Rubin の力量に対する侮辱として解釈される。
- (2) 従来の批評家たちによって指摘されている通り、レンブラントと比較することによって、Rubin に彫刻家として二流にすぎない自らの立場を痛感せしめ、劣等感を抱かせた。
- (3) Rubin は現状ではさえない彫刻家に過ぎないので、レンブラントのような一流の芸術家の力にあやからなければ運が開けないことを示している。(鈴木 27-8)

基本的にこれらの指摘に異論は無い。上記の言葉をきっかけにして起こった二人の諍いの原因を言い当てていると思われるからである。それでは、このように入り組んだ人間関係の最後に訪れる和解はどのようにして生じたのであろうか。当初は全く責任を感じてもいなかった Arkin に何が起こったのであろうか。

III

Arkin は自分の認識の間違いに気づいた後も、たとえ勘違いをしていたとはいえそれが Rubin の何を刺激したというのだろうかといぶかしむのだが、その謎を解くために次のような仮定を試みる。つまり、「かりに Rubin が自分であり、自分が Rubin だと仮定したらどうなるか」という視点を持つのである。長くなるがその箇所を引用しておくことにする。

Whether I was right or wrong, so what if his white cap made me think of Rembrandt's hat and I told him so? That's not throwing rocks at his head, so what bothered him? Arkin felt he ought to be able to figure it out. Therefore suppose Rubin was Arkin and Arkin Rubin—Suppose it was me in his hat: “Here I am, an aging sculptor with only one show, which I never had confidence in and nobody saw. And standing close by, making critical pronouncements one way or another, is this art historian Arkin, a big-nosed, gawky, overcurious gent, friendly but no friend of mine because he doesn't know how to be. That's not his talent. An interest in art we have in common, but not much more. Anyway, Arkin, maybe not because it means anything in particular—who says he knows what he means? —mentions Rembrandt's hat on my head and wishes me good luck in my work. So say he meant well—but it's still more than I can take. In plain words it irritates me. The mention of Rembrandt, considering the quality of my own work, and what I am generally feeling about life, is a fat burden on my soul because it makes me ask myself once too often—why am I going on if this is the kind of sculptor I am going to be for the rest of my life? And since Arkin makes me think the same unhappy thing no matter what he says—or even what he doesn't say, as for instance about my driftwood show—who wants to hear more? From then on I avoid the guy—like forever.” (580)

Arkin はこのとき全想像力を用いて Rubin の立場に身を置こうとする。すると見えてきたものは、簡略に述べれば、Rubin の彫刻家としての自己評価の低さであり、人間関係における Arkin との関係の希薄さであり、Rembrandt を持ち出されたことによる、自分のこれからの二流の芸術家としての人生における精神的重荷を負う苦痛と、それを持ちだした Arkin への嫌悪感だった。それを生々しい感覚としてまさに感受した瞬間だったのである。

このような一種飛躍的・跳躍的な視点を持ったことによって、Arkin は素直に Rubin に詫びることができたと言えよう。それを察した Rubin の目からは涙があふれるのであった。真の和解の成立である。Rubin の側の精神的な、いわば雪解けは、彼が再び例の白い帽子をかぶるようになったことに象徴されている。

このような人間関係の受け止め方を、ユダヤ人思想家ブーバーは「うけいれ」と呼んでいる(小林 425)。「うけいれ」を詳述するならば、

相手の人は、わたくしが一方的にこれを観察しこれに働きかける「対象」ではなく、また、わたくしが、静かに観照する「対象」でもない。この人は、わたくしからは独立している独自の主体であり、わたくしにむかって、ことばを語りかけ、わたくしからの返事をまちうけている主体である。しかも、この相手の人のことばは、単に思想上の抽象的な学問領域や、深遠ないわゆる宗教的経験の領域にだけ発せられるのではなくて、むしろ、日常的な卑近な生活の直中で発せられる。そしてそのことばは、相手の人の全人格をこめて語りかけられ、わたくしと相手の人間の境界をこえてわたくしの人格の内部にはいりこみ、わたくしの全人格をゆり動かす。というのは、このことばは、わたくしにこうしてほしいと語りかける要求であるにとどまらず、その中に、わたくしとは全く異質な「他者の他者性」をふくんでおり、いや、「他者の他者性」そのものでさえあるからである。これを、ブーバーは「他者の存在的根源的他者性」とよんでいる。これをうけいれ、承認する態度が「うけいれ」という態度である。(小林 425)

以上のようなことになる。Rubin の場合は言葉というよりも態度でそれを示していたのだが、当初、“unidimensional monodiscourse”に陥っていた Arkin は人格の扉を閉ざしてしまい、結果、「うけいれ」るのではなく、他者を拒絶してしまったのである。しかし、最後の段階で、上記のような、かりに自分が Rubin だと仮定したらどうなるかという視点を持つことによって「うけいれ」が可能となり、Rubin という他者、それも到底理解不能だと思っていた他者を理解するという経験をするのである。つまり、

他者にむかって誠実な応答を行ってゆく時には、ここに「人格的応答関係の現実」が作り出されるのである。この場合、わたくしの全人格は、相手の人という他者によって、内側にふみこまれ、この他者の他者性によって、わたくしの全人格に何らかの変化を加えられる。しかし、それにもかかわらず、わたくしは、この他者にむかって自己の内側から外へとあゆみ出し、この他者にむかって、私の全人格をこめた応答を行ってゆく。このように、わたくしが、具体的な相手の人の他者性をふくむよびかけによって働きかけられて、私の全人格をこめて、これをうけいれ、これにむかって、自己の扉を開いて、大胆に、飛躍的に他者の人格の内部にとびこんでゆくときのこの決断の力を、ブーバーは「現実的構想力」(Realphantasie)とよんでいる。すなわち、この力は、わたくしが、今、ここで、出会っている相手の他者が、今ここで欲し、感じ、うけとり、考えていることを、単に孤立し独立している内容としてではなく、この人の生活の流れのかけがえのない一部分としての生活現実としてうけとめてゆく力のことである。(小林 426)

Arkin が先ほどの長い引用部分でなしえたのは、自己の扉を開いて、大胆に、飛躍的に他者の人格の内部にとびこんでゆくというリアル・ファンタジー (Realphantasie) の力をもってしたということになる。⁽³⁾ Sío-Castiñeria が指摘していた Arkin の一方的な思考回路、つまり、Arkin の思考の“totalizing character”と“monolithic semantic character”の性質はこれを

もって超克され、“obviously disregarding different interpretations other than his own”と述べられていた問題点も解消されたのである。そうなることで、「相手の他者が、他者性をたもちつつ、欲し、感じ、うけとり、考えていることを、この人の生活現実の事実として、この人の側に立ってうけとめてゆくことによって、この相手の人は、『わたくしに向かいあって立っている独自の主体とされる。』（小林 426）まさに Arkin は Rubín の欲し、感じ、うけとり、考えていることを、Rubín の側に立ってうけとめてゆくことになったのである。こうなるまでには二年を要しているが、Arkin が少しずつ Rubín の側の現実に近づいていたことは上記の通りであるが、最後にはどうしてもこのリアル・ファンタジーという大きな飛躍、跳躍が必要だったのである。

Arkin と Rubín がお互いを罵り合った直後に Arkin は「吐き気」を催しているが、これを Sío-Castiñeria は Arkin が「自己のアイデンティティの安定性の欠如」(107-8) を自覚していたからだと述べているが、自分の一方的な思考回路、つまり“totalizing character”や“monolithic semantic character”への不安を無意識に感じていたからだとも言えよう。その不安を超克するために必要だったのが、ここでいうリアル・ファンタジーだったのである。こうすることで Arkin は“unidimensional monodiscourse”の一方的な思考回路を離れ、真の他者理解へと到達し得たのである。

終わりに

以上、“Rembrandt’s Hat”における「他者理解」に主眼を置き考察してきたが、ひとは Arkin のように一方的な思考回路をもちやすいものだと言えよう。それをいかに乗り越えるかがこの小説では問われているのである。本論ではそれをブーバーの哲学的視点から考察し、ブーバーのいうリアル・ファンタジーという決断力が必要であったことを明らかにしてきた。相手が、欲し、感じ、うけとり、考えていることを、この人の生活現実の事実として、この人の側に立ってうけとめてゆくことこそが真の他者理解には欠かせないことを Arkin は Rubín との争いの中で学んでいくことになったのだが、それによって一方的な思考回路を超克するさまを我々読者が目の当たりにするのがこの小説の真価なのだと言える。ほんの些細としか思えないことをきっかけに起こった二人の人物の諍いと和解に終始する物語とみえながら、人間関係の実に本質的な問題をこの小説は提起しているのだと結論づけられよう。

Notes

1. 影響関係の指摘は、たとえば、Hays (227-31) や Abramson (33-35) を参照のこと。
2. “Rembrandt’s Hat” からの引用はすべて The Complete Stories. による。以降、ページ数のみを記す。
3. ブーバーはリアル・ファンタジーを主として教育現場で生起するものだと考えていたようだ。そのことは以下の引用から分かるが、内容からして教育現場に限定されたものでないことは自明である。

われわれ自身の中に、またわれわれの後に続く諸世代の中に、シンデレラを、つまり、未来に予定された王女としての人間の内奥に生きる天性を育て上げねばならない。(中略) それを(中略) 現実幻想 (Real – Phantasie) と名付けたい。というのは、それは独自の本質から見てもはや直観で

はなく、大胆で、飛翔力が強く、他者への私の存在のもっとも力強い動きを必要とする飛降である。
(ブーバー 104)

Works Cited

- Abramson, Edward A. *Bernard Malamud Revisited*. Twayne, 1993.
- Hays, Peter, L. "The Complex Pattern of Redemption." *Bernard Malamud and the Critics*, edited by Field, Leslie A. and Joyce W. Field, New York UP, 1970. pp.219-233.
- Helterman, Jeffrey. *Understanding Bernard Malamud*. U of South Carolina P, 1985
- Malamud, Bernard. *The Complete Stories*. Farrar, Straus, and Giroux, 1997.
- Ochshorn, Kathleen Gillikin. *The Heart's Essential Landscape: Bernard Malamud's Hero*. P. Lang, 1990.
- Sío-Castiñeria , Begoña. *The Short Stories of Bernard Malamud*. P. Lang, 1998.
- 小林政吉、『ブーバー研究—思想の成立過程と情熱—』、創文社、1978年。
- 鈴木久博、「"Rembrandt's Hat"におけるアーキンの発言の問題点について」、『Schlemiel』、11号、2012年、23-32頁。
- ブーバー、マルティン、『ブーバー著作集』、第2巻、田口義弘訳、みすず書房、1968年。